

六百五十九

四

大將家六百番款合卷中四目錄

冬

落葉

沙菊

拓野

雲

野杉

冬朝

冬松

推紫

衾

佛名



二番
大將

旅次

大將家六百番款合卷中四

全
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十



大將家六百番款合卷中四

冬

一番 藤原

左 持 弘昭

右 信定

これより左の町由より右の町由より
大志殊等御一之旨

判云ある方落致すまじくしつとつ
心討れし一色さく物指とすし

二番

左 藤 兼宗朝臣

つりつらつとお流をれとりの大井河舟の連の也とぬお茶なりとん

二 七

経流つ

およせまたれ小河をるるとりつらと音母の山よりお茶らたり

右方より云危舟とてつりつらと音母の山よりお茶らたり

つらつものつら

危舟より云危舟とてつらつめり

判云危舟とてつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

つらつめりつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

つらつめりつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

つらつめりつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

つらつめりつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

つらつめりつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

三 七

右 拍

夏家綱臣

つらつめりつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

右

隠信お流

つらつめりつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

右方より云危舟とてつらつめり

危舟より云危舟とてつらつめり

判云危舟とてつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

つらつめりつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

つらつめりつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

つらつめりつらつめりつらつめりつらつめりつらつめり

四 番

左

五家朝臣

山内をこすきさひしく成してくわくくわく乃言も庭に枯葉う

右 勝

家陸

木敷られと山乃くれと分ゆけと神よあ〜のびろく〜

たのり云た新しやうありあうてそお様

た方尸云身と分ゆけとく〜

判云た新し下句をれ〜

おゆらん右言をか山乃くれ神よ霞のくた〜

おゆらん右言をか山乃くれ神よ霞のくた〜

たをり〜

み番

左 拍

季禮つ

もはじやう〜

志

中宮権大夫

惜しき花に繁〜

右方尸云左新し五拍輕

た方尸云〜

うめさりきれよや

判云た下句を優〜

風〜

みしゆと袖乃〜

ゆるぬよやふ〜

六番

左 持

女房

なしてん木葉の音とつりてもさしそふりしきりあつり後

右

孫達

町多ゆく松の足とつりハをいれて落よくも我と縁のもみら葉

たあー云たを指輪

厄方り云右れ舞歌心ぬ

陳之含ぬ炭松と云詩乃心也

判えたを家詞よりしくそみしゆる也云又落よくも我

と云海心れりくす由含ぬ炭松の詩ひりすを心を

てしうゆめまはさる程勝若木分の又持とこくくや

七番

秋菊

厄勝

女房

とぬくのたそそき小月けとめてつまねよちるお扱れより

右

後信朝白

うろろふり又さく飛もるれとれと菊やもう妙川ありまいと

右あり云厄云歌心海よ小ちまぬとつとぬり色や

厄方や云心舞詞とくこまきり

判えた舞ふとめてふといへれゆのゆそさこ物まと下句

そ直くゆへしたまひる後よとゆと落をまぬとさう菊う

く懸なる様成打ちのそすやすらん仍れ以厄る勝

八番

左

季禮つ

いつりくうろふふのみのれれぬ心なる八まにちう菊

右勝

家盛

花びらぬゆひも後をさま揃とつろひり西連庭のちうきく

右の下云花弁いたるわれり似らる
花弁中一云花弁花と云とをりともを別りともを打つ
へまりのりも

判云右のうへ花心なりなりといふる事一とてうろふ
とをいへ連と浦菊此心すくなくやゆるん心ぬやとを
をれくおぼく杯と梅乃弁ふとゆもてゆひの神
おとまれろとも之香気ふのこせとも濃香はぬ匂ひも
故きとりんらんと不及歌やうつぬいのこせなく云れを
物不直の右花勝

九妻

左

歌昭

霜ゆきもあひくさたのえも入てきくさ老きぬ花よそきりり

右の勝

経歌つ

潔りふれまうきの菊れびくされを冬ようろふまよそきりり
花心せやと

判云あはれ雲乃花心やましくハ花をぬはくと云れを優なりと
まもくへの詞不可無芽もや花も冬うろふまよそ
ありまると云れ又り理り叶てよろしくようそあそ
約建意れ又その花へ思之冬も仍冬之初れる乃冬也び心
そ自然およまれくうもや又り乃梅梅を志建取く似
とる心姿よろもよや心花勝

十番

花勝

道宗朝臣

著ていけ秋のこころと思ふくさ菊ゆへ冬をうらてまるす

右

舞臺

一枚も打つとけり神ハ白菊のよかひまをよううろひよれ
石弁中云花弁一を拵程

花弁一云花弁一を拵程

陳さまと云うるうろと云うるうろと云うるうろと云うるうろと

うろと云うるうろと云うるうろと云うるうろと云うるうろと

判云右菊所へ又をと云程よ流し一と云うゆめれ花弁も

まくの匂ひ匂即く優もさゆアし流さくの心を匂ひまを

せつふろし流さくの心を匂ひまを

あつまくるうろと云うるうろと云うるうろと云うるうろと

げらんうろふあつまくるうろと云うるうろと云うるうろと

程浦のむもくしりなるうろ一花乃拵なりアし

十一番

花 勝

美家朝臣

白まぐも雲あうくるるうろと云うるうろと云うるうろと

右

中宮控大ま

判うれぬまぐくびりあうハ雲にうろふまもうけりともみん

花弁一云花弁一上句うろと云うるうろと云うるうろと

九弁一云花弁一上句うろと云うるうろと云うるうろと

判云右上句うろと云うるうろと云うるうろと云うるうろと

あつまくるうろと云うるうろと云うるうろと云うるうろと

下にのひ行を寄りの為にけりひ也下句又九番の花弁乃

いとくはみりよ叶なるアし花雅芝のうろと云うるうろと

いとくはみりよ叶なるアし花雅芝のうろと云うるうろと

尸を前も尸のこしく撰集の外をさうりめくしこき事
るつこしくしは性ち殿乃元年一海新一合海菊の魁はこれ
新しむくハむ可般去れ海而さまそそ不お似るやとそ
みしゆと元言優けりてし以元可る勝也

十二番

左

宅家納信

白菊のらうりぬそ乃あるまうかろ一春そ風さとうみきれ

右 勝

信定

花もゆく雪の尸せまそみるまく乃白を種よまこ乃こ所さん
右方尸云元新一海菊は面目之上ト白も心得る一
元方尸云雪は尸せまそよりを

十判云元方海菊を面目之由元方尸不可然花もてり元を

あつされあつはみそととしりろふか以こり人れ詞
不可然花もや元言雪の尸せ又海菊は心もこにみして
れり一雪よりゆめ建凡海人ハ常きよりを再も互
かこりゆのそ又すよりし而れもや以右可る勝

十三番

祐野

元 勝

女房

み一秋を何よりこさん葉の原の心みし海新人乃氣象よ

右

後信朝臣

おくれの野人ハあそ建とみぬ人也秋のりろよをむろあらん
右方尸云雪は原きしゆを
元方尸云元心の新もろめり一
判云元何よりこさん葉の魁といるる勢よりそゆめ建

右方人草の糸糸し甲一之糸願うとくあかまや笠或る方
濃のほとふりも袖即く筆を殊勝之上花鳥の巻ハしこれ
吾んあかまのひり源氏され糸一後を透振れ事なり右
心しこれあかまのひりかきしあかまやとく一為ハ成成し
左糸一已直むりつこし

十の毒

右 勝

既昭

あかまの糸糸といとくや翁草を代野とりとひりやしけん

右

経流つ

あかまの糸糸といとくや翁草を代野とりとひりやしけん

あかまの糸糸といとくや翁草を代野とりとひりやしけん

あかまの糸糸といとくや翁草を代野とりとひりやしけん

判之翁草を殊一不可産芽さゆもその建に冬の野方と思ひ
よまらむ心を優成へしあま志の連ぬとらん此下句を忠詞
つとよろくみしゆとい挟席偏重ひよかせる透振なり
あかまの糸糸といとくや翁草を代野とりとひりやしけん
十又番

左

み家朝臣

あまの糸糸といとくや翁草を代野とりとひりやしけん

右

中宮控大夫

あまの糸糸といとくや翁草を代野とりとひりやしけん

あまの糸糸といとくや翁草を代野とりとひりやしけん

あまの糸糸といとくや翁草を代野とりとひりやしけん

あまの糸糸といとくや翁草を代野とりとひりやしけん

されしむのめしうといふるもおうれの燈をさる
ひきしむのめまといふしむもふりかゝるれとて
おりの強不可産貴もやをふくれを危方すよりとて
詞又すよかうされうやをゆく何可及新半ゆくと
云詞何事しゆも用れ物や以てなる勝

十六番

左 勝

季禮つ

とりの多く野原も松れ志のたれてけりうち小廉うりくる

右

家澄

廉の音も虫もさへくおとしておうれもそぬまふれくり

たのやー云ん新ー宜ん

左方中云ん新さ歌

判云ぬ首の敷板たまやまれく原とりん下句をよろしく
ゆと上句廉も虫もなるのそなたてさうやうもやすめ
危川野邊も松れ志のたれて云むのうらに廉うりくる
云んむよろしきれ似るも仍以危勝とす人し

十七番

左の勝

芝家朝臣

夏りゆもおん乃か草北面新そりのくまのくさく死もうらや

十八右

孫達

村勝さしくおん小まのあとも下もふくすさうみもせめら

右のや云ん新又字のたまり終りぬの字不其心

危方やー云ん恨もてつ

判云危新しなる新まとい世情案山新しに画して優り

あつたれや初又字殊不餘在終極の字心直さよや心舞
又村爲終とといへはを優なりと文甚ふりしりて下り
根もてうせしや儂なりきらゆらん左舞一始終心并雖
舞中一ひるまうあつす以たる勝

十八番

厄 指

兼宗朝臣

荒を控るのを切こもみしりの取極を虫此く急う急う
右 信定

秋の夕乃うつろよ野をさきてみれ終ハくれぬ指しそまけり
心あり云みしりのれいゆりす

厄方一さ心舞一を指歌

判云左みしりのみ又ひゆりすをさくあの新しみをわりのれ

とをけりよろしくみしゆよ小極野を虫此と云れも優よ
しうゆめりた秋の夕乃うつろよ野人よあを連せりれぬ
と云れ心表れ舞くあもアそみしゆり厄又下旬も宜く
みしゆ連はあひうつりておと一し

十九番

雲

左 勝

女舞

風さびときふもみうれのゆら雲を右野山乃雲りまうとたり
右 澄信朝臣

嵐吹来葉あは下雲みう連少りあひりるとり山のねくこれ

厄右た不歌中一

判云厄亦きふも雲乃あつそとをきて右野の山乃雲けなり
きれと云るはあつそりれく山のちのたれへと云舞一れ

心よかなひてつとよろこびしをみしゆ連なる事さひし
つとまゐる山のたぐひといふる下句をむ可成貴之許る
みしゆと上句は本歌よみぬととまゐるや人のこれだせん
格上句をゆらむ格を上下お叶へぬ事一仍勝とを

女番

厄

季纏つ

後もよみ連ハ思う連れをむらん歌う此歌をぬやまー

右

勝

信宅

う波わくふ花のあつと此春ぬき冬れを中もありりりの歌
たあやー云まーあー如何

厄方中云右舞一冠の字みとを合もをりく

判之云ハ思うれのそふふらんといへれをたーくもゆと

下句やまぬる一ぬのらぬ事一もはひたりのやあつむ
ぬやまーあーあーいれも舞一詞もさつと花れあつこの
春ぬきとをき冬のそふもありりる袖とといをらゆと
たーくみしゆら題の字よりまともとを連とみしゆ
事一已を限ハ右勝とまゐし

女一番

厄

五家朔辰

人めしそくれもそふめ山字に目就をみしとみうれあつ此

右

勝

家澄

りまもそみうあつをやさしうめておもそゆ何あ成ら
右あやー云と連ゆらうらむゆりす

厄方中云思う歌くすれく又上のみせ又まきくや

判云元新しきうきあつはを又なとむゆのぬゆりし
さうれゆりはくもふと日新みとまやとそやさ
海りふんをこころけりそりりしとそりけりをも
不可及事なり下白凡水をもぬ町多きんとまれ
あつぬゆりしはゆりてまくとつれてまことむを
あまきつゆらん

廿二番

左

定家朝臣

あつぬゆりしはゆりてまくとつれてまことむを
あまきつゆらん
あつぬゆりしはゆりてまくとつれてまことむを
あまきつゆらん
あつぬゆりしはゆりてまくとつれてまことむを
あまきつゆらん

右 勝

中宮権大夫

判云元新しきうきあつはを又なとむゆのぬゆりし
さうれゆりはくもふと日新みとまやとそやさ
海りふんをこころけりそりりしとそりけりをも
不可及事なり下白凡水をもぬ町多きんとまれ
あつぬゆりしはゆりてまくとつれてまことむを
あまきつゆらん

左 勝

道宗朝臣

あつぬゆりしはゆりてまくとつれてまことむを
あまきつゆらん

孫尊

回前

あつぬゆりしはゆりてまくとつれてまことむを
あまきつゆらん

しうつとよろしうのれたき上句をきとやせぬ下句も
町毎と又のやいへ里上下とさう違ふは振りやゆるし左御
且いゆるなと云れ難よ故——くすゆい左勝と云へし

廿四番

右 持

歌昭

うつれ山夕あそくれはさうれゆり神ほししひの表あのだひ

右

經家つ

きふをまるとしは此よりさう違ふとわくすもなれりるを衣耳

右あり云危方無指取

危方——云右あめり

判云危神りしひの表あのだひかと云るさひて八すまゆ

さうつ乃山さうつりふりくやゆるし伊勢柳燈あせり

うつれ山さのうつあもなとりんはふあもさう違ふ違ふ
ともやしをそれゆへるなはさう雲ありゆへりうん山も
表らのたひといふしふもは月くゆはりうつれ山ゆへ
りくてきらまを詮なくやめむ心くさぬくまのまの
ゆれぬ者りすと云れ方も霞まてき登持ものたすりた
りしをすゆた心せう乃山くさぬまのりつこまてり
うりぬへくさくも日程の事と——し

廿五番

左

歌昭

お月原やのれはこゆまよふそそさうさふのまらふ乃登

右 勝

經家つ

さみ原くし歌きくを乃明しはをきふのみゆきたくれまて

右六丁之不尋て并しめてきつばんと

凡方ヤ一云くは同前

判云凡方一とくは一はふそ何とてこのひの家事一と
約め連大原やや並つれもて一山とつひて一と大原野
とをさこ物連と一はとけくけをてき大原や取不活ハ
大水ともせり井のあともりひても大原やとそと事也
そ大原ハ穀山ハ野の例全中をさて一山に一と
聖例奉例を約事るれせり井乃志あれ一と一ハ事そ
なくともあうひてゆりんたしそ中を待れまらふ乃
尋も中やらるるうすうたもやたあ一と迄志りつがよを
ゆと後詠乃魚も事すく那はらう一やとをさこゆ連と
後詠乃清事疑は一と迄まをされくく也

廿六番

左 持

み家朝臣

甲尋とあうまはぬ一ひふとて迄あ家おくれこゆさへら

右

信多

う尋もあふとうれ一と思小乃終り一取人のきふ乃湯事小
た志不極一

判云あ首一と尋をあうまたり一みひふと人志を並と
うけ一空たりふらんと一人里面有たれ一とさこ物仍
指とすへし

廿七番

凡

兼宗朝臣

きくを留りのれく魚乃とゆさもをたさたをやまらあらん

右 勝

中宮権大夫

と入らきのきふれは幸をみうるとは葉葉もなひく物とそま字
右方中一云きくまハ冬りのぬ事一によう

陳云を比のまよぬくみしゆまや

危あ中一云身一後干まやの字をあわくや

判云危身一右き池をやなと云れき直くゆへしきくをれを

けきりのとをうたふのよまて山身一にうてきくを鳴と

をりの思ふるくやまをきしゆらると太奇をへらきのや

ましま學も歴と云れいじいふしよまり以右可る勝

廿八番

右 指

定家別旨

物衣れと流のみらもたらうるりうらねとゆま野風さむり

右

家隆

徳人の指もの小野ううゆら散きふのみゆまにまうらりきれ

右心せま一と

判云おと流のなりとソ人れをふゆ乃きうると此おもれりい

やうまそれ一々字を侍とまゆやこしけり事一けくゆは

うまその小野よゆら散をまきけろ事認人のとまうこ

きふれまゆまおといゆる回事ハ各あけん振まやまこ

ゆらん振勢分のけうまれまや

廿九番

右 指

季隆つ

右のけの連成うく流けるまうれうのきりゆ乃流小まうのま

右

季隆

石乃野より北へ見ればみまはしの川と云ふを流るるなり

右あり之元新一之珠歌

元方下之氷北極をうづさん事つゝ又お何用也

判之西の北極流うく流と云野の北極きふみれと云流

をせ小慢りくと元きそのきり川その字をうふすゆたハ

お海と小倭成じらして又つれまされとテ歌や

北番

元 勝

女房

きり川の波もきりうららうの流るるをぬりりふり

右

陸信和臣

みゆまをり野人のゆらるる中に分てあて終をぬきせり川の氷

た心せ不極一

判云元心せり川流るるをぬひつゝくくの勝勢を信る録と

元乃勝流の山風今一坂をららぬ不きるよやゆらと

一番 冬朝

元

歌昭

山里をあさ川わらふ乃者しぬふれこりり乃流をきりり

右 晴

家澄

若川のこがれふあ家山里に人も言きぬ今お乃きりゆき

右あり云々歌

元下之ふあ家よりを

判云元山甲をとりり冬物まておあつもい川こそ

もありぬ人き流きそ海つり水村のまてうゆへ又おハ

心とあさ川わらりもるるよや心新一おたふあ家ハ

海にもふりのゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに
ゆの音よりよりハ雪のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに
やとそむまをさくゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

二番

左 勝

み家朝臣

海にもふりのゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

右

経家朝臣

あさきまに丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

右中云丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

一丸中云丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

判云丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

約まを丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

庭を丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに
心右勝ゆりらん

三番

左 勝

道宗朝臣

とくしに丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

右

信長

折のうちに丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

右中云丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

丸中云丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

判云丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

の例也又丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

つぎ折の中に丸丸のゆをさくゆまに丸丸のゆをさくくらに

よろしくみしゆり佳の言も信より即くやゆらん厄の法
むつらうりやむ方人中の徳を其の物によくやゆらん

四番

左 勝

定家卿臣

いとせと秘めけくせるおやのてみ雪氷るははしらのもそ

心と

隆信朝臣

人とあくとそそようみ建今朝を我中初ん迄乃惜さ小

心ありてはあゆししけふれとあれを

厄方一云右新帯心也

判云厄新一年とひりめ盡しあひさのそそといそ

雪もありくやゆるうんとそそは母を徳と携てこわ

とソ人れやし遠てすゆらん心新や吉の物人とあ

回を我中と初む迄乃惜さうなといはは梅のひなり

上り詞とあて余ううお空してやとてようみ建おと

ソ人れ心も雪ゆもれとりてやゆらん

み番

左

季純つ

ははしらのそとそとる物とてあつて建おあつとあそ

右 勝

中宮権大夫

お戸あけて都のふみとひりひまはゆまの携や深まれそ

た心ありうりゆ

判云はを物起をその中とあうひまそやあなるうそ

お母とゆとばを言冬の初作くはとそまやとみそ

いくを都のふみとそはす山れ喜撰と都のふみとあ

そとじと宇治山とそよめりそと都とそと深草の里と八都
乃の三首のむすハとこれひたしそよめりや雪の枝也
けしよろしとそと物心と勝とす人し

六番

右 持

女房

言少りそと炭のおきれはのけりんそと此のやとそとむすれとそと

右

舞臺

けりめやれ衣とそとむすの月とそと枝る炭のそとゆさ

厄心まき感氣

判云厄心一と係とそとけりるそと枝のそとむすむと云云

まの月とそと枝るといへれむ詞そとそとそとそとそと

め建おれをけりそとそとそとそとそとそとそとそと

とそとそとそとそとそとそとそとそとそと

七番

き松

左 勝

舞臺

雪のそとそとそとそとそとそとそとそとそと

右

季經

今おとそとそと雪のそと枝のそと枝をそとそとそとそと

厄心一と云云

厄心一と云云

判云厄心一と云云

れも縁のそとそとそとそとそとそとそとそとそと

うひゆれそとそとそとそとそとそとそとそとそと

乃のそとそと人信とそとそとそとそとそとそとそと

透帳乃中人お早し出向や心松のしとてはくまをたしそ
たぐも濃てゆまは常は事しはれや高砂の松ふととらや
らなくや約らんた乃をれ為松勝とと人しし

八番

厄持

兼宗朝臣

松竹の音をいひとも分ねともこすをれ雪や冬をさうひー凡
右 中宮権大夫

ひへてむの持し風をよまれとも松吹をとをさうひーつとらり
あふたうひよ木耳心之由とや
判之あ方乃松風いくもくの勝あうし仍持とと

九番

左

宅前朝臣

あつてきてまこころもあく雪のうちおれも年深ま松の冬は

十番

右

陸信朝臣

ゆのふまはせにたうまねりらまう松をものせれはひのふれ
厄心さうし夏うぬ由成中

判之厄を上句を優よみしゆと下句凡さも年ありまや

あまそものゆるあらんた并いあるれもとりんれを不可
飛芽ゆと下句の松を風乃や云れよろしくすゆらまや
仍以右勝とす人くや

十番

厄勝

野昭

右 長聖山よりこのりもねよおさとして松風もやー海ぬあのみさ

右

舞蓮

か山なりとてその阿とヤミリ散りて散りのとまらまらつら音のれ
たたは無頼——とゆ——あや

判え死を野山とくつらと称よと云此等と張るう足即くせ
とくと考りて木代林と称ともしそ志ゆらめ西連を只
すく成りつとくともうらとまてうらしえて供とくもや又松
のせとやしを懐け——もよあてとれなりやんと山なりとせ
をけつらとの山をりあてたとも子あて山れよや散探をれ
松の音も可成りも中しとせれくし西あともはことととせの
らんことをむらうてたまらともよあてとせよやとく——
た程すあ——ハマとせゆらりやゆらん

十一番

友 持

ま家別居

あうつひ松とみたりみ吹のむんせもきう環と山をら——此風

友

家隠

さし——して持乃志とく廻とるさおのへれ松の雷れううの散
るたたひよ不頼——

判えし番た心しそせんとくうゆのれた松と縁う吹せ
とま丸上の松の雷れううの環とせれ心討勝勢りくみし
ゆりらと指りらへし

十二番

友 勝

女房

志ありる音のこりそもとらとてくおとくくや散のまらつをせ

友

信多

持中も散半のさく音散りらうら——音よりるまけり散乃まらつ散

左心持一長辨之由

判云左方旅の松尾お取しとを考よりつと約なとり人凡甲し

なく右備連と松尾をくくはんとすし一まさ取もや約は

十二番 推葉

十二瓦 女房

山守のさひ一さねりふきふりゆへくしとめてる葉の推葉

右 勝 舞蓮

各このりふとさねりふきふりゆへくしとめてる葉の推葉

左右心長辨之由

判云左心長辨之由一と思ふをふりゆへくしとめてる葉の推葉

とくしとめてる葉の推葉

とくしとめてる葉の推葉

十四番

左 指 歌詠

山守のたより成せ思道りう志井乃こやてたれくをもあつ南

右 歌詠

山守のたより成せ思道りう志井乃こやてたれくをもあつ南

右心持一長辨之由

判云左心持一長辨之由一と思ふをふりゆへくしとめてる葉の推葉

とくしとめてる葉の推葉

とくしとめてる葉の推葉

とくしとめてる葉の推葉

とくしとめてる葉の推葉

とくしとめてる葉の推葉

十六番

左 勝

兼宗朝臣

左の志の元本にしようしてはもたつたり志并紫
右 経家つ
志と志并乃もとれたる世と音も因もたつたりを
心一云ふのそひてつ

元平志并事也

判云左志の元本よりそんよとやなつりふつふひもや
事そひてしう扱ふくさこゆつほこれ云程りれもぬ
ひらーゆ連志并そさびこしう平懐よゆめ連つたせ
とも下ろし物もりなくさこぬ下ろ事よろしく
さこぬ勝ととく也

十六番

左 勝

兼宗朝臣

いこせし我成ゆも推紫の志りーをさそまうけーのつー成

右

信家朝臣

位山みらの志ぬをそとーやりて越り人そつーやまぬ
石心速懐のひらりまうとぬりーと
判云ぬ方とも速懐を回まをたハるの志并志そと云れ事
心しりーくさこぬ元ようを勝信りぬ

十七番

左 持

季経つ

おろしりる杉葉も下ろしなるもつりつらもろくぬ炭ハ推紫
志 信家

志井志との三十一と思ひ一むの中凡四十のせよらるゝに多
右に云凡新一無可ヤ一事

左一右速懐同ホ

判之凡文祝云とくも又物つゝ祝云中も中してお討宜く
こそゆめれ心ま速懐ハ之合にうらまのそぬ事一おゆき
と又物を例之上おれ姿詞とく何みとをひも守るゝ
優よすそそ勝安部一ゆきおとさうす人くや

十八番

左

定家別後

志井業を冬う人よとく生たれことくおめれおを木じ

右 勝

中宮権大夫

深山ると夕あえくれと志お志とのうれもつゝふ玉殿うれ

志ナ云凡新下句の

凡中一云石玉霞きくより

判之左の下句を右お人あをのにヤ一あう下句を
直くうみとゆめ何世志ゆふあそくれもうれもれ
ことく一も何ゆみとゆめ玉を又何をもおひら詞
おゆよりあを建とくお顔玉投顯とをなと世まり不及
歌凡仍心可る勝

十九番

右

左 勝

女房

さゆらあよののゆいあをのておしおおとつひひつ

右

深達

木葉とや香の上毛よりあすらんおをの表もさゆらあよ

右心せしり

判云元新し響巻乃ゆと海と別と成てとりひて神に水と拂
し子成くと云致む可成者元不及子細い元る勝

廿番

右 指

季澄つ

主孫すあけの衣もなになじ力成あしめよあさてこふと海

右

経家つ

さゆら扱のきりも今そあじりあけの袋はあ月をみぬ是は

右心平不被産者之由

判云元ハ力と所とくゆるといふ心のさびさも今とと云致

盗討方人たりひよ不被産者由一与事も愚也可不足

云る同也

廿一番

右

弘昭

あつふと海おとやりきりそ思や致ひばしそ扱とりさゆらめ

右 勝

信玄

既るのり扱とのとりさゆれもひとり向を海乃床うばひ云

元心共ぞり

判云元あつぬと海おと元力此のひの風折よちのし右一人

ふと海おとそへしふと海よき治建とつこつ小のり

よとりのそと云致お慢善よきもの右勝

廿二番

右 持

三 家朝長

さへ人の元たりふと海おとゆらりお逆扱との名し秘負元

右

中宮權大夫

さゆらぬそのあはれをともめもつるふはれをたすらぬあはれとてと念
右ヤ一云さへ人不高

陳云思第集

元中云可ヤ一事

判云元云さへ人先くと下事以ゆ連と系集集よんらると
つひつれも困ゆる事ハ不可然ゆり也万系集ゆもつり
也さよろつりかへる事一と後へるなり心集一もあはれ
こふも海なり可系乃風體有り也一元もゆたろ小を片断
とくひかとたさふにあらうたし指を可ヤ也

廿三書

右 勝

兼宗朝臣

埋火のあはれとれまると升あぬまを扱床れふをぬうそお社み連

右

隆信朝臣

卯の夜の神さしつるふをれ扱そ床よゆをぬ乃のひも月さ其
右ヤ一云元ぬをぬうもれなりつり

元ヤ一云元無指部

判云元おれふをぬを埋火の道は袂話して念似るか指元
右をを氣珠海来て念已似勝まうかひなるのたよりハ扱
暖りて傍しをあらん何事の在半元勝包くや

廿四番

右

定家朝臣

ひふつりけけの念たるたてちもひくれをりこれ録の言

右 勝

家隆

雪比ふの思ふもつらきとせむしぬらう国ゆふとまのちじ成らん

右中之鐘の歌

左中之志事一巻

判云左新し小正處と引申くはし鐘の歌にたてし鐘

有りきれと遠き鐘なりと思ひく讀まらるるや尚志方鐘行

取平と申し又さてもあふ事や右新しハ書よはせたりふ

もつらきともむの望けりぬこもに小正まの志事一なるし

仍ぞ歌と右の勝へふ小しうゆめれ

廿六番 佛名

右 拈 歌 照

とびへけりみらの佛の有りはうふ奈そ久し一取ましくめ茶叙

歌の右 経家つ

唱けり世のほとあは外し又大文人乃なの歌く一や七

た心共し一の中一取らぬなりと人むも大文人必錫もとら

ひへふ事し

判云左心とも佛名歌の決牙をふとくはと思ひる心も新し

新も同書なりし

廿六番

右 勝

宅家朝臣

河竹のなひをとり後も年くれて三世八かつけ乃は名をす非

右

歌 巻

うれしくも罷も歌のふ清ぬ也善初年やあうしけりるらん

右中之志事一巻

左中之志事一巻

判之元来一川竹のなひく群みらぬわとけなと云れらるる
よしとしりり詞のたぐし右赤龍のまゆらさうれし
張なとりひてそ下の句此心を叶へまうけくもどき
て六年の接もうけくを扱ふやぢゆらんは作禁座乃
りさく物れまや勝とす人し

廿七番

左 坊

ま家朝臣

徳人の必し人きくけり今世もこむよのほこりなとや

右

中宮権大夫

とび人けり世のふとあもきくやとて大言人きり取之り

心一に云元身一のうあうとけらる

九下云右言必掲やふとけれたあまあぬらわ

判之方下句不輕大士の力りあまらむらへし心必掲の意

徳そのゆりあめ建りやうふりらん何事一在平くし

たも必し人きくけりなといゆる事あさくれとも下句

心理よ叶へれまや勝勢なくてゆらん

廿八番

左 坊

季澄心

うたさひ竹のたしうとあてうとむのふとけれ必とて唱る

右

孫達

的やうぬ敷ハまの雲そけりるともおれる龍やまよまあらん

心や云元言可歌や一事

心や一云こ不まるつといく

陳云煩惱水也

判云凡新三世の事とけりやいんため行の地といへ
すや一珠くやゆるんを舞しこねるつこやをよきゆ
と云れ優よみしゆを所このきゆらりの冬松名のひすく
なくやめしむおすしあふお指としるくや

廿九番

左 勝

道宗約臣

あまやの三世れはとあも認人もるあしりてゆき藤目

右

隆信朝臣

冬あられまの凡月の明しこりし月の里そむるくも乃う人

志し云左舞しを指舞

凡し云名湯不取佛名

陳云十二月廿日比乃名湯を佛名也

判云凡言を歌之由云ありと云く志まのこりし書乃上
人ひのこそいてん佛名なりらんや但まの凡月のめしこ
おなの里しそり邪云とらん勸曲のりしゆくまうして
しそれ何言約連を歌りくそ可る勝

廿番

左 指

女房

一年のころのまををいぬるもとせのふとけのしひ此習さる

右

信夏

とひんけりほとあれとるし物日よてやそ清りひとくせのあ

凡右時不歌し

判云凡言しりさま夏ハあめゆしんとしひ三世れはとあれ

しひれひくまんとらんれ家心珠おまうしりやようみし

110X
355
8